

LEADERS NOW!

「落語大学」で 話芸を究める

ハワイ公演、ふくいニコニコ寄席…
広がる活躍舞台

●文化会落語大学 学長・文学部 3年次生
原山 敦 さん (芸名：関大亭 茜丸)

近年、落語の人気が高まり、幅広い年代層に支持されている。落語の定席、天満天神繁昌亭(大阪市北区)は連日賑わいを見せ、大阪の新名所になっている。上方落語協会会長の桂三枝さんもかつて芸を磨いた関西大学文化会「落語大学」も、もちろん元気がいい。今年3月にはハワイで公演。8月に福井県高浜町で開いた女子学生による寄席も好評だった。ここで、落語大学学長の関大亭茜丸さんに登場してもらおう。

千里山キャンパスのKUシンフォニーホールで10月8日、学生の企画・運営による「関大一発ギャグ王決定戦」が開催された。爆笑と熱気に包まれた会場で、20人の出場者によるギャグ合戦に勝ち残り、「関大で一番のおもしろやつ」の称号を贈られたのが、本名で出場した原山さんだった。落語大学学長の実力を発揮したが、関大亭茜丸としては「落語の面白さはコントやギャグのそれとは違う」と思っている。



「落語は漫才やコントと違って、笑いを取るだけではなくて、一つの世界、一つの話の伝えないといけない。キャラクターの魅力とか、ストーリーの進め方とかもあり、お笑いの難しさと同時に演劇的な難しさも備えています」

茜丸さんは、父親の影響で落語を聴くようになった。好きな落語家を一人挙げるとしたら「桂枝雀さん」。実は、枝雀さんは落語大学の創設にもかかわりがある。1963(昭和38)年、関西大学文学部国文学科主催による秋期国文学会の一環として開催された「落語大学」に、桂米朝、桂小米(後の桂枝雀)両師が出演し、上方古典落語についての雑談会があった。その終了間際に先生から「誰か落語を研究するクラブを作らないか」と勧められ、同好会として結成されたのが落語大学の始まり。クラブ名も当初の呼称を受け継いでいる。翌年の新学期に新生生の勧誘を行い、真っ先に入部してきたのが、当時2年次生の河村静也(浪漫亭ちっく・桂三枝)さんだった。

落語大学の主な活動には、6月にワッハ上方で開催する名物



原山 敦—はらやま あつし
■1987(昭和62)年、大阪府生まれ。清教学園高等学校卒業。文学部3年次生。文化会落語大学所属、芸名は関大亭茜丸。2008年度の落語大学学長を務める。

公演「すねかじり寄席」、学園祭期間中の「千里寄席」があり、他大学とのジョイント公演なども行っている。今年3月には、2004年に始まって4回目となるハワイ公演を行い、茜丸さんも参加し、現地在住の日本人観客に古典落語を披露した。

現在、部員数は35人。そのうち女子は10人。8月に合宿で訪れた福井県高浜町で、女子6人が参加した「ふくいニコニコ寄席」を開催。地元の落語好きの人ら約50人を前に高座に上り、温かい声援を受けた。

普段は昼休みに集まり、落語や三味線、太鼓、寄席文字の練習を続けている。一人ずつ落語を披露して合評を受けるが、これがかかり厳しい。「語尾が不明確」、「せりふを言い終わる前に表情が変わっている」、「前回の指摘から2カ所しか直っていない」……。泣きそうになる人もいます。茜丸さんも「暗い」などと言われている。

「人物の感情がなかなかうまく出ないので悩んでいます。しかし、お客さんから笑いが返ってきたときはすごくうれしい。同じ落語でも、1年生のときとは全く違う笑いが起きたりする。自分が上達しているのを感じつつ、話芸の深い面白さを知れば知るほど、未熟さも分かってくる。「関大で一番のおもしろやつ」が、「うちのクラブにも他の大学にも、僕より年下でうまく子がたくさんいる。もっと頑張らなあかん」という。

一球同心で共に 夢を追う

夏の甲子園(全国高校野球選手権大会)で優勝

●大阪桐蔭高等学校 硬式野球部監督(社会科教諭)
西谷 浩一 さん —経済学部 1993年卒業—

今年の夏の甲子園で優勝した大阪桐蔭高等学校の監督、西谷浩一さんは、関西大学を卒業してすぐに高校野球指導者の道に進んだ。プロで活躍する選手を輩出しているが、いくら頑張っても甲子園に出られない苦しい時期があった。多感な高校生たちと共に寮で生活し、甲子園への夢をはぐくんできた西谷さんには、人生の節目で進路を決定づけた一人の関大OBとの出会いがあった。



小学校2年から少年野球を続けてきた西谷さんは、甲子園にあこがれて強豪の報徳学園高校に入学した。甲子園の土を踏むことはできなかったが、伝統校でキャッチャーとして野球に取り組むうちに、将来は指導者として高校野球にかかわりたいという思いが頭をもたげてきた。そのとき、「関大はキャッチャーが足りないから」と、関大受験を勧めてくれる人がいた。当時、スポーツ用品メーカーに勤めていた長澤和雄氏だった。彼が阪急ブレーブスで活躍した山口高志さんと同期で、関大が大学日本一に輝いた時の4番バッターであることを、西谷さんは全く知らなかった。

関大野球部の練習に参加した西谷さんは、持ち前の力を発揮できたので手応えを感じていた。しかし、練習終了後、マネジャーから「これで勉強、頑張るよ」と、入試の過去問題集を渡されて戸惑った。なんだかおかしい。そこで初めてスポーツ推薦がないことを知った。「うちはたとえ桑田や清原が受験しても、野球だけでは合格できないと言われたのを、今でも覚えています」。結局、1年浪人して入学。

学生時代の最大の思い出は3年生のとき、1991年春季の関西



西谷 浩一—にしたに こういち
■1969(昭和44)年、兵庫県生まれ。報徳学園高等学校卒業。関西大学体育会野球部で主将を務める。93年関西大学経済学部卒業。大阪桐蔭高等学校社会科教諭。同校硬式野球部コーチを経て、98年に監督就任。2008年夏の全国高校野球選手権大会で優勝。

学生リーグ優勝。近畿大学と同率でプレーオフ。追いつかれ、逆転されたが、最後に勝利は関大へ。「神がかり的な試合展開でした。僕は控えて、ベンチやブルペンで声を出していました。山口さん、長澤さんら以来の19年ぶりの優勝ということもありましたし、スポーツ推薦がない状態で勝ったことにも意義があったと思います」

経済学部で教職の単位を取るの大変だったが、教師になって野球の指導をしたいという初心は揺るがなかった。3年生の秋に主将になったころ、長澤さんから「来年卒業したらうちのコーチに来ないか」と、声をかけてもらった。長澤氏は既に大阪桐蔭高校の初代監督として、その夏に甲子園初出場で初優勝を成し遂げていた。

創部4年目で全国制覇を果たしたが、それから2002年までの11年間、甲子園には手が届かなかった。「勝てずに悩み続けましたが、今考えると野球部としての土台づくりの時でした。甲子園の舞台に立てなくても、大学や社会人、プロで卒業生が活躍してくれていたのも、やっていることは間違いではないと自負できました」

同じく関大OBで、今年大活躍した阪神の岩田稔投手が高校2年の冬に糖尿病を発症して入院したときは、練習が終わると毎日、「とにかく顔を見に」病院へ直行した。西谷さんが監督になった年に入ってきたのが岩田投手であり、またクラス担任でもあった。

同期に、西武の中村剛也選手、1年下にロッテの西岡剛選手がいる。巨人の辻内崇伸投手、中日の平田良介選手、そして日本ハムの中田翔選手らが続く。しかし、エースと4番だけで野球はできない。西谷さん自身もレギュラーではなかった。

「長澤さんが大事にされ、今も受け継いでいる野球部の部訓が『一球同心』です。一つのボールにみんなが同じ心を持って戦う。競争はあっても家族同然。試合に出ない子も一生懸命頑張るのが、うちの一番の自慢です。関大の野球部にはそういうムードがあり、それが今の指導の根本になっていると思います」